

開拓者精神と農村留学

一人は自然を開墾し、自然は人を開拓す— 明治45年 石井十次

園長 児嶋 草次郎

宮崎県は、6月27日に梅雨が明けました。例年より18日も早いと言うことです。梅雨が2週間程度しかなかったこととなります。セミも26日から鳴き始めています。アジサイはせっかく元気いっぱい花を開いたのに、いきなり30度近くの太陽の光を浴びて、花は焼けてしまっています。アジサイは、あくまでも梅雨の花ですので、こうなると、早く剪定をしまして来年に備えた方がよいのかもしれませんが。一方夏の花、カンナは、待ってましたとばかりに一斉に赤やピンクの花を輝かせています。これから地中の株を増やしながらか、晩秋霜が下りるまで咲き続けてくれます。

さあ、これから暑さと雑草との戦いが始まります。しっかり水分補給して、暑さに負けないようにしたいと思います。草刈り機を使うことが多くなります。が、腰を痛めないように気をつけたいと思います。このごろ自分が高齢者であることを自覚せざるを得ない体調の変化を感じるものが時々出て来ており、人様に迷惑をかけないように、この夏を乗り切りたいと思います。

今「雑草とのたたかい」と書きましたがロシアのウクライナへの侵略戦争は、まだ続いており、残念でなりません。ウクライナ国民は、必死で国を守ろうとしているようですが、ロシアからの無慈悲な爆撃は日常化しているようで、東部の町や都市が焦土と化しているようです。太平洋戦争末期の日本の都市のアメリカ軍による無差別爆撃を思い起こさせます。原爆を含めて、あれらも明らかに戦争犯罪であったはずですが、今は、そのことを問い詰める人は殆どいなくなっています。ロシアの指導者も、あの頃から思考回路が全然進化してないのでしょうか。人間は何と愚かな生き物なのでしょう。

焼け野が原となった日本の国土を再び蘇らせたのが、私たち親の世代です。敗戦から77年、日本は平和な国に復興しています。戦争を体験した人々にとっては、そこはまさに地獄でしたが、その地獄からはいあがり、次の世代へと歴史と文化をつなぐために働いた人々の苦労も、筆舌に尽くし難いものでした。もうその多くの人々がこの世を去っています。

ウクライナの戦争がいつ終わるか全く見通せない状況ですが、戦争が終わったとしても、その後の国土の回復には、莫大な資金とエネルギーを必要とするでしょう。

そんなことをアレコレ考えているうちに、この茶臼原の戦後の歴史に思いは飛んでいきました。

昭和20年の敗戦後、この茶臼原台地、標高約138m、面積約900ヘクタールの軍馬養成のための大地（陸軍の軍馬補充部）が、日本の復興と食糧増産のために、国より解放されたのです。全国から復員軍人を初め多くの若い家族が約300戸、個人的には国土復興のためというより、生き延びるために入植し、開墾を始められます。満州や朝鮮、そして台湾からの引き揚げ者もいました。そうです、あの戦争がなかったら、おそらくこの茶臼原の開拓の歴史もなかった。大陸からの引き揚げ者の中には、敗戦時のドサクサにまきこまれ、ロシア兵から蹂躪（じゅうりん）された人もいます。戦争の地獄をくぐり抜け、新たに希望を抱いて開墾作業に挺身しても、辛酸をなめる苦労を繰返しています。二重の試練でした。

この茶臼原の開拓の歴史とは、まさにそのような内容のものでした。戦争とは切り離しては考えられない。この開拓の歴史を語ることは、戦争の悲惨さを思いおこし、戦争のない社会を希求していくことに導くものでもなければならぬでしょう。

この大地で育ち、またこの地で仕事をさせていただくようになった私（たち）は、子育てをしながら、この茶臼原の開拓の歴史を（書き）残したいと考えるようになりました。1987年（昭和62年）です。戦後、40年が過ぎ去り茶臼原もある程度落ち着いて、主役も開拓2代目となり、初代の方々にも余裕が少しは出て来ているのではないかと思えたからです。

開拓者の方々に自由に思い出を書いてもらうこと、そして、開拓当時の農具や日用雑貨等を収集すること。その行動を始めるにあたって、「石井記念ひかり保育園」を通し、地域の方々にビラを配っています。その中に次のようなことを私は記載しています。

「あれから40年、茶臼原は豊かな恵みをもたらしてくれる大地へと変貌しました。これほどの発展を、あの当時誰が予想したでありますよ。

そして、今はもう二世の時代です。子は親の後姿を見て育つ、と言われます。開拓者たち、すなわち、おじいさん、おばあさん、の苦勞を、二世たちはしっかりと見て育ったのであります。『開拓者魂』を、二世たちは忘れることはないでありますよ。

しかし、これから後も、この精神は受け継がれていくでしょうが。この茶臼原は二代で終わるわけではないのです。これからも、未来にむけて、ますます発展していかねばならないと思います。

それでは、いかにしてこの精神を守っていくのか。それには、当時の資料をできるだけ保存し、それを子供たちに肌で触れさせる。それ以外にないのではないのでしょうか。」

そして、「開拓者精神を子子孫孫に伝えてく。」「未来永劫に、子供たちが誇りと克己を抱き得る大地として輝かしていきましょう。」と呼びかけています。

「開拓創刊号」は平成5年（1993年）1月に発行され、資料は石井記念ひかり保育園に隣接する「祖父母クラブ」（旧農民道場場長宿舎）に保存。その後、資料集は第二号（平成6年7月）、第三号（平成7年11月）、第四号（平成8年11月）、第五号（平成10年6月）、第六号（平成12年3月）、第七号（平成14年3月）と発行されていきました。農具等の資料も170点近く集まり「祖父母クラブ」を「茶臼原開拓資料館」と変え、少し増築もして、展示も行いました。

茶臼原小学校の児童も見学に訪れるようになり、「第三号」には、その感想文等も掲載されています。この一連の活動が実現できたのは、もちろん協力者あつてのことでした。感謝の気持ちで、その主な協力者のお名前をあげてみます。松生和代様、宮内登美様、橋口計男様、押川隆夫様、原田隆治様。

第十号まで発行して、それらを合本して資料集として出版し、近隣の小・中学校、関係機関に寄贈して、教育に活用してもらおうというのが最終的な目標でした。

ところが、友愛社の事業に集中しているうちに、私にどんどん余裕がなくなり、申し訳ないことですが、活動は中断。第七号が出てから20年という年月が経ってしまいました。私たち第二世代も、どんどん高齢者の世界に入っていく、今や第三世代の世の中になってしまっています。

ここで少し話を変えます。6月20日、茶臼原小学校の校長室で、西都市長他1名、茶臼原小学校校長、茶臼原小学校PTA会長（大崎さん三代目）、それに私の5人が集まって、意見交換会が行われました。私がある場で西都市長に提案したことについて、市長が当の小学校の校長とPTA会長と話す場を作ってくださったわけです。現在、茶臼原小学校の児童数は40名です。そのうち友愛園の児童は13名です。私がPTA会長をした平成5、6年当時は100名ほどの生徒がいたと思いますが、その当時も、小学校の存続に危機感を持っていました。PTAや地区の代表の方々に呼びかけて、小学校

後援会を作ったりもしました。その後、その後援会も自然消滅し、生徒数もジリジリと減少してきました。現在6年生だけが10名以上で、来年度は、一挙に30名台になるとのこと。小学校としては限界でしょう。

友愛園の子供たち(小学生)は、戦後70年以上ずっと、この茶臼原小学校でお世話になって来ました。団塊の世代が学んだ頃は別として、その後は小規模校として存続し、友愛園の子供たちは、地域からも先生方からもあたたかく受入れてもらい、多くの子供がここで人生を取りもどすことができました。戦後開拓者によって作られた村ですので、古い村にありがちな排他的な閉鎖性もなく、とにかく開放的なのです。しかし、これ以上減少すると、良い意味での子供同士の相互作用がうまくいかなくなる可能性があります。

そこで私が提案したのが、西都市銀鏡(しろみ)地区でやっているように、「農村留学生」を茶臼原小学校で受入れたらどうかということ。

校長室で私が話したことです。

- ① 茶臼原小学校は戦後ずっと友愛園の子供たちを受入れて来ており、先生方にその受入れ体制・文化はすでにできている。地区の人たちも子供たちも戦後ずっとあたたかく受入れて来てくださった。昭和52年から17年間ほど、ベトナム難民(延べ529人)が友愛社で生活し、子供たちは茶臼原小学校に通ったりしましたが、地区とのトラブルは一切ありませんでした。他者を受入れる文化がこの茶臼原にはできています。
- ② 茶臼原小学校には、石井十次の理念と開拓者の精神(フロンティア・スピリット)が流れている。そのような小学校は、日本全国どこにもないと思う。友愛園の子供たちも救われている。そういう理念や精神を生かす教育がここではできると思う。一教室に、石井十次の理念や開拓者の精神を学べるコーナーを作ったらどうかと思う。
- ③ 昭和20年日本が敗戦し、約300戸がこの地に入植して、77年がすぎた。今、三代目になろうとしています。開拓の歴史や文化が形成されて来ている。次の時代を担う新たな開拓者たちを受入れてもよいと思う。子供だけではなく、親もこの茶臼原に移住して来てよい。

同席してくださった方々は、それぞれに賛同はしてくださったようでした。PTA会長さんからは、次の役員会の時に話をしてみるということでした。話がどの方向へ進むのか興味があります。コロナやロシア・ウクライナ戦争で、都会生活が決してメリットばかりではないということ、多くの若者たちが自覚し始めています。インターネットも発達し、田舎生活が不利ではないという時代に突入し始めています。せめて子供たちが小学校くらいまでは、その感性や心を養うために、大自然の中で木や草や動物との共生生活を体験させてあげる、そのような若者・親が増えることを期待します。それこそが石井十次の「時代教育法」(幼年は遊ばせ、少年は学ばせ、青年は働かせる)です。

その話し合いの後、私は、「開拓」7冊を読み直しています。「開拓者精神」(フロンティア・スピリット)とは何かと自らに問いかけてみて、うまく答えられなかったからです。「開拓」から、いくつか関連する言葉を拾いあげてみました。

「重い山鍬を振り上げ一鍬一鍬荒地を耕して行くのですが、重労働で幾度か挫折しそうになりました。しかし自ら選んだ道を途中で投げ出す訳には参りません。歯を食いしばってがんばりました。」

比江島重安 73歳 開拓創刊号

「父は好きな焼酎を飲むと、よく昔の苦労話をした。『まこち、あの頃は苦労した。話にならんは。』『食いもんがない。電気もまだきちょうらんし、それに金もねえしなあ…』『まこち、ようがんばっ

たもんじゃ。』

黒木智一 59才 開拓二号

「貧しさの中であってお菓子の等頂きますと、母は必ず仏壇に供えてから兄弟に同じように分けてくれたものです。家族の絆、感謝する気持等子供心にもこうするものだとして自然に身についたような気がします。」

浜砂キヨコ 55才 開拓第二号

「昭和二十年、終戦と同時に茶臼原開拓が始まり、この台地に姉夫婦を訪ねて足を踏み入れたのが、昭和二十一年三月、私十五歳であった。夢と希望を抱いた。」

『辛抱したら此処は望みがある。哲雄よ、姉の言うことを聞いてがんばれよ。お前にはよい所じゃ』と父は言った。」

有田哲雄 64才 開拓三号

「茶臼原に来た頃は、今の様になるとはとても想像できませんでした。子供たちのため豊かな茶臼原にするためにと、今まで努力して来ましたが、今では可愛い子供たちと楽しい毎日が暮らせる様になりました。戦争に負けた時には考えられなかった豊かな日本の国、つらい日々もあったけれども、辛抱してよかったとよろこんでいます。」

松生麻子 74才 開拓三号

「当時の茶臼原は、一面に広がる松林とかや、すすきにおおわれ、やせた荒地だったのです。そんな荒地を、体力の盛を過ぎていた父母は、幼子大人を食べさせるため、山ぐわ一本で野山を切り開き、耕して、作物を作らねばなりません。かたまりのかややすすきの根をほぐすのに、何十ぺんも山ぐわでたたかないと、そのかたまりはほぐれず、朝くらいから夜遅くまで開墾してもほんのわずかの面積しか畑にはならなかったようでした。」

「現代は、金さえ出せば何でも楽をして手に入れる世の中です。幸せな事ですが、反対に考えますと、がんばる力、創造する楽しみ、心の豊かさ、苦難に耐える力が失われていないでしょうか。開拓一世の方々が汗と涙で築いてくださったこの台地を、二世・三世が力を合わせて、もっともっと身も心も豊かになる大地へと育ててゆかねばならないと思います。」

原田隆治 57才 開拓第七号

未来を信じ、夢を描き、家族を思い、子供たちのために、山鉾で一鉾一鉾、笹や茅の根のからみ合う大地を掘り起こしていく時の、歯を食いしばってがむばり挑戦する開拓第一世代の根性。それがこの茶臼原の「開拓者精神」ということになるのでしょうか。家族や開拓者同志で協力し合う中でこの地独自の絆や感謝の気持も獲得されていったのだらうと思います。排他的ではない茶臼原の人々の包容力は、そういうところから来ているのだと思います。

石井十次の理念はある程度整理しています。これからこの開拓者精神もしっかりアピールしていけば、茶臼原小学校ですばらしい教育ができると思います。

コロナ感染症の地球的な大流行を初め、様々な天災や人災が人類を繰り返し襲うようになっています。自然との共生が強く求められる時です。地球の未来を担う子供たちの教育にも原点回帰が求められます。

広大な茶臼原大地のまん中に立ち周囲を見回すと、父祖たちが命をかけて開いた広い畑の中を大型トラクターが行き交い、巨大な牛舎では、多くの牛たちがゆったりと寝そべっています。太陽は暑く空はどこまでも高く、周辺の森や林の木々はたくましく、遠くの山々は青く輝いています。ここは人と自然が共生し合う一つの理想郷です。宮崎県の枠を越えて、全国から子供たちを集める教育場になることを、私は夢想しています。